

エコミュージアム活動における住民の現状意識と主体間の関係

—山梨県北都留郡小菅村を事例として—

和田綾子

東京学芸大学環境教育実践施設

The present awareness and relationship among people and organizations
in the ecomuseum project

Ayako WADA, FSIFEE, Tokyo Gakugei University

1. 問題の所在

山村地域には、長い年月をかけてその地域の資源や特質に適合する形でつくりあげられてきた様々な智恵や伝統が存在している。しかし、過疎高齢化やそれに付随する問題によって、文化の継承が困難になってきている現状がある。地域づくりのひとつの手法として知られているエコミュージアムにおける「地域住民の主体性」は、これらの活動を継続していく上で非常に重要な要件となっている。

2. 研究の目的

山梨県北都留郡小菅村におけるエコミュージアム日本村の活動を事例として取り上げる。小菅村民のエコミュージアム活動に対する現在の認識・興味関心・期待や要望、観光資源への認識、ミュージアム研究会の現状を明らかにし、今後の課題を考察する。

3. 研究の方法

小菅村民に対する質問紙による聞き取り調査、およびミュージアム研究会への参与観察。

4. 結果および考察

質問紙調査では 26 件の回答を得た。その結果、エコミュージアムに対する認識は高いとはいえないが、小菅村民の多くが村の現状と問題を把握し、自主的な行動には至らないまでも、その問題の解決となる手段を受け入れる姿勢

を有していることがわかった。自立していける地域づくりのためには、多くの村民がエコミュージアム概念を正確に把握・理解すること以上に、自主的な活動を支える村への愛着意識を持てるよう、専門家、行政、有志活動者が協働してアイデンティティの源泉を発掘し、村民と共有していくことが重要である。

また、エコミュージアム日本村の活動の核となるミュージアム研究会への 2 度の参与観察では、2007 年 3 月の第 8 回では専門家の主導による議論が中心であったが、8 月の第 9 回では村民も議題や話題をもって会議に参加している様子の変化が読み取れた。コアミュージアムとサテライトの関係性もより深まり、小菅村内外の多くの団体との繋がりが形成され始めている。

今後活動が進展していく中で、村内の様々な問題やエコミュージアム活動の運営から生じる課題の解決のためには、各組織や各個人が活動から得たいと考えている成果を、ミュージアム研究会などの公の場で明らかにすることで、お互いを深く理解・認識しあうことが重要である。その作業を行うには長い時間を要することが考えられるが、活動を展開していく上で発生する障害や課題に直面した時に、活動を支える強い力となるだろう。各組織の独自性と特徴を把握することは、ハード以上にソフトを重要視するエコミュージアム活動においても、全国各地で行われている同様の活動の中での独自性を創り上げていく上でも欠かせないことである。

図 エコミュージアムにおける
主体間関係の変化

